

文楽にふれよう

伝統芸能コース

文楽

目的

- 大阪が世界に誇る伝統芸能「文楽」を体験し、日本の歴史や伝統文化に対する興味・関心を持ち、豊かな感性を育むきっかけとする。

効果

- 文楽の奥深さや楽しさを実感し、海外にも紹介・説明できるようになる。
- 文楽技芸員の舞台への真剣な取り組みを知り、進路を考えるきっかけになる。

到達点

- 日本独自、世界唯一の伝統芸能「文楽」への理解を深め、価値を知る。



講師 吉田 幸助
よしだ こうすけ

略歴

人形浄瑠璃文楽座・人形遣い
1980年吉田玉幸に入門、吉田幸助と名乗る。翌年、朝日座で初舞台。平成11年・15年・18年度因協会奨励賞、平成12年・14年度文楽協会賞、平成18年度「咲くやこの花賞」(演劇・舞踊部門:文楽人形遣い)、平成20年国立劇場奨励賞を受賞。祖父は3代目吉田玉助、父は2代目吉田玉幸。



- 会場は、机や椅子などのない会議室や運動室、体育館などが望ましい。
- 事前に本やビデオなどで、文楽の基本的な知識を入れておくとう理解しやすい。

事前学習

資料「文楽—鑑賞のために—」
「人形浄瑠璃 文楽」を読む。

ワークショップの流れ(1日間く4コマ/日)

「人形浄瑠璃」「文楽」「竹本義太夫」
「近松門左衛門」をキーワードに、
ビデオを観ながら文楽についての講義



太夫・三味線・人形遣いの仕事を実演によって紹介



太夫の浄瑠璃や三味線、
人形の遣い方を個別指導で体験



「三番叟(さんばそう)」と「艶容女舞衣(お園のさわり)」を
上演鑑賞



質疑応答

事後学習

国立文楽劇場で、文楽公演を鑑賞する。



…ワークショップを実施して…

講師の感想

[研究者の講話→太夫・三味線・人形遣いの実演と体験→略式上演]という流れによって、生徒たちは文楽の全体像を実感できたようだ。文楽が関西(大阪)で生まれた日本三大国劇の1つであることを知り、技芸員の職業観について質問するなど、伝統芸能への興味を示していた。ワークショップを通じて、日本の文化芸術を世界に発信できる素地が育まれることを願っている。

先生の感想

初めて文楽を観る生徒がほとんどなので、今回の体験によって、文楽を身近に感じ、地元に残る歴史ある芸能に興味をもつ良い機会になった。大阪の文化・伝統芸能に対する“敷居”が、少し低くなったようだ。文楽に関わる仕事を、数ある職業の1つの選択肢として見るようになった生徒もいた。

生徒の感想

- ・何百年も続いてきた素晴らしい芸術と伝統文化を、絶対になくしてはいけないと思った。
- ・太夫の語り口調が、女性と男性とで違うのに感心した。人形が息を吹き込まれたように自然な動きをしていて、すごく迫力があつた。
- ・人形や三味線に触らせてもらって、複雑で繊細な仕組みや技術があることがわかった。

より発展的な ワークショップを 実施するために

- 大阪の文楽のゆかりの地を訪ねて、まちを散策する。
- 文楽と能楽、歌舞伎などの違いを調べて文化祭で発表する。